

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530754

研究課題名（和文）専門学校の教育と卒業生のキャリア

研究課題名（英文）Specialized training college and graduates' career

研究代表者

小方 直幸（OGATA NAOYUKI）

広島大学・高等教育研究開発センター・教授

研究者番号：20314776

研究成果の概要（和文）：専門学校教育の機能を卒業生調査、企業調査を通じて検証した。専門学校教育は、進学時に十分でなかった職場で継続して学ぶ力を身につけさせている一方で、職業教育としてどの水準まで担保できているかは必ずしも明確でなく、将来的な課題として残されていること、卒業生のコアな就職先である中小企業における初期キャリアが、専門学校での学習を活かし処遇も考慮しているものとうそでないものに二極化しており、専門学校教育の評価を左右するという意味でも、専門学校教育だけでなく、卒業生を活用するキャリアを用意できているかという就職先の質も課題であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research project, the function of specialized training college is examined through graduates survey and company survey. Specialized training colleges have an important role in the point that they train learning competence, but the function of vocational training and its platform are not necessarily well-established, and the initial career in the small and medium size companies as a core group for graduates is polarized and the quality of the place of employment becomes an important issue that determines evaluation of specialized training college.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：専門学校、卒業生、職業キャリア

1. 研究開始当初の背景

知識基盤社会の到来と経済のグローバル化の下で、高等教育の人材養成機能に対する

期待がこれまでになく高まると同時に、高等教育自体のグローバル化が進行し、教育の質をいかに保証していくかが焦眉の課題となっている。従来、この問題を考察する領域には、卒業時の移行形態やキャリア教育・支援に着目した研究と、教育内容と仕事のマッチングに着目した研究の2つの大きな流れが存在した。

しかしながら、我が国で1990年代以降の15年間に進行した高等教育と雇用をめぐる環境の変容は、バブル経済の崩壊に端を発した労働需要の減退だけではなかった。進学該当年齢人口の急減により、入学時の選抜が機能しない高等教育機関が多数出現することとなり、学生の学習行動や学力問題が遡上に乗ることになった。出口問題に着目した上記の2つの研究領域に加えて、在学中の教育・学習経験という教育の質に着目した研究が重要となり、これら3つの視角を統合した分析・考察が求められている。

このうち、大学や短大を対象とした研究は、大規模な卒業生調査が行われ、在学中の学習と卒業後のキャリアの実態が明らかにされつつある。ところが、専門学校（専修学校専門課程）は、進学該当年齢人口の4人に1人が進学し、量的には大学に次ぐ巨大なセクターでありながら、体系的な研究がほとんど行われていない。ましてや、在学中の学習、卒業時の職業への移行、卒業後のキャリアをトータルに把握した研究は、未着手の領域として残されたままである。

2. 研究の目的

本研究は、我が国の高等教育システムを考察する上で不可欠な存在であるにもかかわらず、未着手に近い研究領域であった専門学校を取り上げ、従来、個別に扱われがちであった在学中の学習、卒業時の職業への移行、卒業後のキャリアという3つの視角を統合した体系的な考察を通じて、今後の高等教育システムと雇用システムのあり方を展望するための基礎的資料を得ることを目的としている。具体的に明らかにする点は次の3点である。

第1に、卒業後の初期キャリアをターゲットとした専門学校の卒業生調査を実施し、専門学校卒業生の在学中の学習行動・学習経験、卒業時の就職活動、卒業後の初期キャリア形成の実態を明らかにする。

第2に、専門学校卒業生の就職が多い中小企業を中心とした企業調査を実施し、専門学校卒業生の企業における採用や初期キャリアにおける処遇の実態を明らかにする。

第3に、以上の2つの実態分析の結果、並

びに申請者がこれまで行ってきた大学生（大卒者）調査や短大生（短大卒者）調査との比較分析の成果を踏まえて、わが国の高等教育システムと雇用システムにおける専門学校の位置を明らかにする。

3. 研究の方法

上記の課題を考察するため、卒業生調査、企業調査の2つを実施した。

卒業生調査は、首都圏の12の専門学校の卒業後7年目、3年目、1年目の5904人に調査票を郵送し、1221名から回答があった。回収率は21%である。調査項目は、「在学中の経験」「卒業後の進路」「現在の仕事」「専門学校教育と仕事との関係について」「本学に入学するまでのことについて」「あなたご自身について」の6つのパートから構成されている。

企業調査は、専門学校卒業生を採用している2785社に調査票を郵送し、862社から回答があった。回収率は31%だった。調査項目は、「専門学校卒業生の採用について」「専門学校卒業生の処遇について」「仕事と専門学校教育との関係について」の3つのパートから構成されている。

またこの研究プロジェクトは、調査票の策定や調査結果のフィードバックが着実になされるよう、社団法人東京都専修学校各種学校協会の協力を得、協会に加盟する専門学校との協同プロジェクトとして実施した。

具体的には、まず、調査終了後に専門学校教育の実践にも寄与できるよう、協力校のメンバーとのやりとりを通じて、現場の視点も含み込んだ調査票の項目を確定した。次に、分析結果のフィードバックが着実に行われるように、調査結果の概要の報告会を開催して情報を協力校の間で共有することに加えて、各協力校にデータを返却して分析を行ってもらい、個別期間ごとの分析結果も協力校同士で共有し、教育改善に結びつけていくための仕組み作りや具体的な方策について検討してもらった。

4. 研究成果

卒業生調査からは、以下のことが明らかとなった。

第1に、高校在学中の経験が専門学校進学後の行動にどのように影響し、また専門学校の提供する教育が、在学中の行動にどこまでインパクトを及ぼし得るかを検証したところ、高校段階までで従来は獲得していたと思われる、学習態度の形成機能が抽出された。専門学校は、普通科の高校が扱う一般科目ではなく、職業と直結した職業教育を提供する

ことで、学習への動機付けを行い、学習態度を獲得させているが、それはあくまで高校教育の不全を基盤としており、専門学校の独自機能とは言い難い。

第2に、専攻によって卒業後の初期キャリアは大きく異なっていた。初期キャリアの特徴を分ける鍵は、正規雇用か非正規雇用かという雇用形態で、後者から前者に転じることは容易でない。転職行動をみると、職種別労働市場が形成されているケースもあるが、労働条件が劣悪なために異動が生じている可能性も否定できない。また、雇用形態や労働条件を背景に、当初は学習内容と直結した仕事に就いていた者が、そのルートから退出することも生じている。加えて、専門学校教育に対する評価を左右していたのは、年収や労働時間といった量的な労働条件よりも、高い能力を要求される仕事であるか否かという質的な労働条件であった。

第3に、在学中の学習経験や卒業後の初期キャリアの形成を踏まえて、卒業生が専門学校教育をどのように評価しているかを考察したところ、職業能力の形成に果たす専門学校の役割は、高卒時点までの役割と比べて決して小さくないことが明らかとなった。ただしそれは、即戦力の教育ではなく、将来の基盤としての教育である。その一つのコアは、職場で継続して学ぶ力である。ただしそれは、先に指摘した通り専門学校教育の独自性とは言い難い。今回の分析からは、卒業生が卒業後のキャリアに活かせる職業教育のコアとして、何を学んでいるかを明確に抽出することができなかった。そのこと自体が、専門学校教育に課せられた課題ともいえる。

企業調査からは、以下のことが明らかとなった。

第1に、専門学校卒業生の主たる就職先は中小企業である。確かに、専門学校卒業生を当初から採用してきたのは、規模の大きい企業である。だがその位置づけは、高卒や大卒の代替であり、専門学校が持つ専門的な職業教育機能に必ずしも期待した採用ではなかった。卒業生調査からは、職場で継続的に学ぶ力の獲得が最も評価されており、これは訓練可能性に関わる能力だが、専門学校の場合、学科と業種の結びつきが相対的に強い。このことは、業種の採用特性が、そのまま専門学校教育の評価を現している可能性が高いことを意味し、専攻別、業種別の分析の有効性が示された。

第2に、専門学校卒業生の初期キャリアとして、将来性が展望できず専門学校卒業生の位置づけが曖昧なキャリア、相対的に狭い専門性に依拠しつつ業務が高度化するキャリア、専門を越えた幅広い業務を経験するキャリア、そしてマネジメントが要求されるキャリアの4タイプが確認された。専門学校卒業

生を雇用のコア層と考える中小企業では、将来的にマネジメントに関わるキャリアも留意され、正規での雇用が多く、処遇面では大企業に及ばないものの定着率は高い。大企業就職＝望ましいキャリアとは単純に言いえないのである。ただし、中小企業の中でキャリアはさらに二極化しており、一方に初期キャリアのプロセスで年収の増加が見込まれ定着率も高い企業群が、他方に年収の増加が見込めず離職率が高い企業群が存在している。

第3に、専門学校卒業生への期待の高さは、企業内教育の脆弱性の裏返しという側面もあるが、専門学校卒業生により高い能力を要求していたのは、非大学型高等教育機関の卒業生を雇用する割合が高く、規模的にも小さい企業であった。だが、専門学校在学中に獲得される能力は即戦力ではなく、職場での経験を必ず必要とする。そして、企業の目から見た専門学校卒業生の獲得能力と、専門学校卒業生に期待される要求能力とのギャップは、専門的な知識・技能というハードな能力よりも、汎用的な技能や態度といったソフトな能力であった。

以上の結果を踏まえて、短大や大学と比べた際の就職率の高さをウリにしてきた専門学校だが、専門学校での学びが職場で十分に活かされるためには、就職先の質も問われざるを得えず、それも含めて、大卒の採用研究が注目してきた企業規模と機関の威信の対応分析、いわゆる大企業モデルは分析枠組として機能せず、専門学校研究に適した中小企業モデルの構築が待たれることを指摘した。

最後に、調査の手法について付言しておきたい。学卒者のキャリアを明らかにし、そこから教育内容の評価や改善を行うための情報を得る手段として、卒業生調査等が用いられることが多くなっている。ただし、特に今回の卒業生調査、企業調査のように、いくつかの限られた学校をベースに調査を行う場合には、調査にバイアスが生じる可能性が高く、安易な一般化は避けなければならない。

これを克服するための方策の1つは、より完璧に近い形で大規模な調査を実施することである。ただし、そのためには大きな予算

も必要とされ、今回のような小規模のプロジェクトでは対応が難しい。もう1つは、複数の調査結果を綿密に擦り合わせて解釈の精度を上げることである。今回は、卒業生調査と企業調査で、回答を想定する卒業生をできるだけ揃えることにした。また、卒業生調査と同じ学校の卒業生を採用している企業を選択した。こうした工夫をすれば、2つの調査結果を比較することの意義が確保できる。

確かに、企業の人事担当者は、卒業生自身よりも厳しい評価をくだす傾向にある。ただしそれは回答水準の問題であって、項目ごと

の評価の傾向に関していえば、能力評価であろうと専門学校教育への期待であろうと、類似している。また企業からみた初期キャリア分析の結果も、卒業生調査から得られた結果を支持・補完するものであった。もちろん、この度の卒業生調査、企業調査を通じて得られた知見は、検証済みの仮説ではなく、あくまで構築された仮説に過ぎない。今回の調査の再分析や別の調査を通じて、近い将来、仮説の検証が待たれる。

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①小方直幸「専門学校教育と卒業後のキャリア形成」『キャリアエデュ』査読なし、No.27、2009、12-17 頁。
- ②小方直幸「専門学校教育と卒業後のキャリアに関する調査から見えてきた課題」『キャリアエデュ』査読なし、No.26、2008、5-15 頁。

[学会発表] (計 1 件)

- ①小方直幸「専門学校卒業生のキャリアと専門学校教育」日本高等教育学会、2008 年 5 月 24 日、於東北大学。

[図書] (計 2 件)

- ①小方直幸編『企業からみた専門学校教育』高等教育研究叢書 108、2010、全 88 頁。
- ②小方直幸編『専門学校教育と卒業生のキャリア』高等教育研究叢書 103、2009、全 99 頁。

[その他：講演]

- ①「専門学校教育と卒業生のキャリア」社団法人広島県専修学校各種学校連盟教職員研修会、2009。
- ②「専門学校における教育・学習経験と卒業生のキャリア」まなびピア埼玉、専修学校教育研究協議会、2009。

6. 研究組織

(1)研究代表者

小方 直幸 (OGATA NAOYUKI)

広島大学・高等教育研究開発センター・教授

研究者番号：20314776

(2)研究分担者

()